

ジェンダーレスファッションの拡大と社会的受容性 の変化

杉本 ケイスケ

本論文のテーマは、ジェンダーレスファッションの拡大が、特に若い世代である Z 世代にどのように受容されているのか、またなぜ一定の支持を得ながらも偏見や否定的意見が残されているのかを明らかにすることである。近年、ジェンダーレスファッションはメディアやブランドを通じて広がりを見せている一方で、違和感や否定的反応も指摘されており、その受容の実態を把握することが求められている。

先行研究においては、ジェンダーとファッションの関係性やジェンダー規範の変容について、主に幅広い年齢層や社会全体を対象とした理論的・歴史的な分析が行われてきた。一方で、特定の世代、とりわけ Z 世代に焦点を当て、その受容のされ方を検討した内容は十分とは言えない。そこで本論文では、まずジェンダーとファッションの関係性を整理し、ジェンダーレスファッションの歴史や動向、先行研究における内容を確認したうえで、大東文化大学社会学部生を対象にアンケート調査を実施し、ジェンダーレスファッションに対する意識や評価を分析した。さらに、服装画像を用いた性別イメージの調査を行い、言語的評価だけでなく、視覚的判断によるジェンダー認識についても検討した。

調査の結果、ジェンダーレスファッションは Z 世代の若者に肯定的に受けとめられており、受容性は拡大しつつあることが明らかとなった。一方で、本論文によって新たに明らかになった点として、受容がすべての装いにおいて均等に進んでいるわけではないことが挙げられる。特に、男性の化粧やスーツなどのフォーマルな服装においては、「男性らしい」「違和感がある」といった回答が多く、服装を性別と結び付けるジェンダーイメージが依然として残っていることが示された。また、否定的意見は少数であるものの、特定の表現に集中している点も本論文の結果として確認された。

以上のことから、ジェンダーレスファッションが単なる流行ではなく、社会の価値観やジェンダー観と深く結びついた現象であることがわかる。